

堅かた物ぶつ  
シンデレラ

春風がそよいでいる。

納屋秀美は額に手をかざし、雲一つない大空を見上げた。

頭の中で、自分が秘書を務める桜山会長のスケジュールを確認する。

秀美と会長は今朝、東京から愛知県T市に移動してきた。名古屋にほど近いこの工業地域に会長をはじめ重役が勢揃いしたのは、本日アメリカから帰国する『新社長』を迎えるためだ。

彼は午後三時に、ここ桜山製作所東海工場に到着する。

（現在の時刻は午後二時四十分。会議室の準備もオツケー。社長が遅れなければ、すべてスケジュールどおりね）

オーバル型の黒縁眼鏡の位置を指先で正すと、背後に目をやる。

社屋前の広場に、大勢の社員が集まっていた。誰もが緊張と期待の入り混じる顔で、社長の登場を待っている。特に女性社員達は、そわそわして落ち着かない様子だ。

秀美は前に向き直ると、あらためて周囲を眺めた。

集会やイベントに使用される芝生グラウンドは、サッカー場ほどの広さがある。工場エリアとの

境にはポプラの木が植えられ、その梢の向こうに大きな建物が覗いていた。

白い壁に青の塗料で『第一加工部』と書かれている。

秀美は慌てて視線を逸らす。あの建物には特別な思い出があるけれど、仕事中に考えるようなことではない。

(それにしても、いつ見ても立派な工場だわ)

東海工場は敷地面積が広く、生産設備は日本一の規模を誇る。東京に本社を構える桜山製作所だが、創業当時はこちらを拠点にしていたという。

戦後、小さな町工場からスタートした工具の会社は、国内外に大きなシェアを持つグローバル企業に成長した。現在は自動車など輸送機器の部品を作るための工作機械や、CNC(コンピュータ数値制御)装置の開発・製造販売を主な事業としている。

「納屋君、あれはヘリの音か？」

「はい、会長」

グラウンドに面した最前列に会長が立ち、その左右に副社長ら重役が並んでいた。

秀美は会長の斜め後ろに控えていたが、一歩前に進み出て東の空を指さす。背後の社員らも、その方向に目をこらしている。

青い空に豆粒ほどの影が現れた。まっすぐ近付いてくる機体は、社長を乗せたヘリコプターに違いない。午後二時四十七分。腕時計を確認して、秀美はホッと息をついた。

「空港には、リムジンが迎えに行っただけでは？」

副社長が尋ねると、会長は肩をすくめた。

「高速が渋滞しているからと言って、社用ヘリを呼んだらしい。まったく、贅沢なやつだ」

「なるほど。しかし、そのおかげで時間どおりですよ」

副社長の言葉を聞きながら、秀美はうんうんと頷く。

(新しい社長も時間を守る方ですね。良かった)

安心すると同時に、少し緊張してきた。社長——桜山慧一は会長の一人息子である。

北米支部統括兼事業本部長として現地工場の経営を立て直し、六年ぶりに凱旋帰国するという。まさに、花も実もある御曹司だ。

今年二十九歳の秀美より三つ年上で、とにかく仕事ができる人だと聞いている。いくら跡取り息子でも、ちゃんぽらんばんな人間に企業のトップは務まらない。きっと会長に似て厳格なタイプなのだろうと、秀美は想像している。

顔写真、プロフィールなどのデータは揃っていても、実際に会うのは初めてだった。明日から、正式に彼の第一秘書になるというのに。

ヘリコプターが減速しながら敷地内に進入し、ゆっくりと降下してきた。地上にいる男性社員が両手を広げて誘導する。ローターが巻き起こす風にグラウンドの芝生が叩かれ、土埃が舞い上がった。スキッドが地面に接し、社長を乗せた機体は無事着陸した。秀美はヘリに向かって歩き出そうとする。

「お出迎えいたします」

「危ないよ、納屋君。ここで待ちなさい」

会長に止められ、秀美は元の位置で待機した。

やがてスライドドアが開いて、一人の人物が芝生に降り立つ。

社員の間にざわめきが起こった。特に女性社員の興奮した声が高く響く。彼が登場したとたん場は活気づき、華やいた空気に満たされていく。

（あの人が桜山慧一。王子様のように見目麗しいと評判の……）

遠目にも分かる、整った目鼻立ち。アッシュブラウンのミディアムショートがよく似合っている。データによると身長一八五センチ、体重七十八キロ。一見スマートだが、よく見ると肩幅が広く、身体に適度な厚みがある。その上姿勢が良いので、自信にあふれた頼もしい男性に映るのだ。

ワイルドさが彼に風格を与え、優れた容姿をスタイリッシュに仕上げていく。いかにも、若きエグゼクティブといった風情だ。

慧一はパイロットを労うと、芝生の上をまっすぐに歩いてきた。

長身にダークブルーのスーツを纏い、花束を手をしている。百本はあろうかと思われる真紅の薔薇だ。まるで映画のワンシーンのような光景に、重役から一般社員まで誰もが釘づけになった。

秀美と会長だけが冷静な態度で待ち構えている。

「ただいま戻りました」

「うむ、ご苦労」

親子は短い挨拶を交わした。重役らは微笑みながら見守っている。

（ああ、なるほど。まさに王子様だわ）

近くで見ると、社長は本当にイケメンだ。人気俳優かモデルのような、洗練された魅力にあふれている。女性社員が色めき立つはずだと秀美は納得した。

だが、そんなことを考えている場合ではない。秘書として、きちんと挨拶しなければ。

姿勢を正して慧一を見ると、彼の黒い瞳には再会の喜びが浮かんでいる。けれど――

どういうわけかその眼差しは、会長ではなく秀美に向けられていた。

「秘書の納谷秀美さんだね。会いたかったよ」

「……はい？」

彼は爽やかに微笑むと、ふいに腕を伸ばして秀美の手を取り、自分のほうへ引き寄せた。

「えっ、あの」

「心を込めて贈ります。どうぞよろしく、俺のお姫様」

薔薇の花束を差し出され、秀美は思わず受け取った。わけが分からず、対応に困ってしまう。これは一体どういうことなのか。

（それに今、『お姫様』とか聞かされたような。しかも『俺の』って……?）

その場に居合わせた全員が注目してくる。会長だけが空を見上げて、大きなため息をついた。

秀美は努めて冷静さを取り戻し、慧一の顔を見返す。会長に似て厳格なタイプだろうと想像したのは、間違いだったようだ。

「失礼ですが、今のお言葉はアメリカ式のジョークでしょうか」

「ジョーク？ とんでもない、俺は本気だよ」

「しかし、私は『お姫様』ではありません。本社の秘書課に所属する一介の社員です」

それもアラサーの堅物女。決して若くはなく、姫という柄でもない。秀美が大真面目に対応すると、慧一も笑みを消して真顔になった。思いのほか厳しい顔つきを見て、秀美はドキッとすする。

「そう、明日から俺の専属秘書になる、納屋秀美さんだ」

「……」

そのとおりなので返し方がない。シンとした空気に耐えかね、とりあえず掴まれた手を離そうとした。けれど慧一はしっかりと握り、解放してくれない。

「社長、お放しください」

「どうして？」

「ど、どうして……」

秀美は堅物眼鏡の異名を取る、真面目で地味な社員だ。男性に絡まれることなどめつたにないの  
で、うまく対処できない。

（新しい社長って、こんな人だったの？ 初対面で、しかも衆人環視の中でからかうなんて、ふざけてる！）

自分は困っているのに、慧一のほうはなぜか嬉しそうに頬を緩めた。秀美はカツとなり、花束ごと彼を押し返そうとする。

「納屋君、受け取っておきなさい」

会長が突然、厳しい声で命じた。

「えっ？」

（受け取れって、花束を？）

命令を理解できず、秀美は戸惑う。この手の冗談は会長も嫌いなはずなのに。

「それでは秘書さん、参りましょうか」

慧一は満足そうに笑うと、社屋に向かつて歩き出した。秀美は花束を抱えたまま、強引に連れていかれる。慌てて道を空ける社員達に、驚きの目で見送られながら。

「ちよ、ちよっと待ってください……会長ーっ！」

助けを求めて振り返るが、会長の姿はどんどん遠くなる。

春風に乗ってやってきたのは、ふざけた王子様。先行きが思いやられる、衝撃の出会いだった。

帰国早々、役員との会議や食事会、式典の打ち合わせなど、タイトなスケジュールをこなしていく慧一。そのふるまいには既に社長らしさが滲み出ている。女性のみならず、すべての社員がまぶしそうに目を細め、彼に見惚れていた。

慧一は社長としての資質を十分備えている。初対面での言動には面食らったけれど、秀美はひとまず安心した。

やはりあれはジョークだったのだ。専属秘書となる自分に『どうぞよろしく』とユーモアたっぷりに伝えたかっただけ。ちよっとやりすぎの気もするが、アメリカでは普通なのかもしれない。

(でも、『お姫様』は勘弁してほしい。あと、手を繋ぐのも)

男性が苦手な秀美には、刺激が強すぎるジョークだった。

その翌日、名古屋市内のホテルで、新社長の就任式が執り行われた。重要な式典は創業の地で、うかがいながら、榎山製作所の決まりである。会場には得意先や関連会社の重役など、多くの招待客が集まっている。

社長就任の挨拶をする慧一は完璧だった。トップに立つ者に相応しい、堂々とした態度。張りのある声と滑らかな口調。若く頼もしいリーダーの登場に、人々はさすがに榎山家の御曹司だと褒め上げ、期待の拍手を送った。

就任式の後、秀美は会長と呼ばれた。会長の傍には、新しい男性秘書が控えている。彼は本社の社員ではなく、海外支部で経験を積んだ国際秘書だ。

「納谷君。君は三年の間、社長秘書として私を支えてくれた。社長交代の間際までスケジュールを管理してくれてありがとう。感謝しているよ」

「会長……」

尊敬する会長の言葉に、秀美は胸がいつぱいになる。

「これより我が社は新しい時代に入る。未熟な若社長を、君がサポートしてやってくれ」

「はいっ。頑張ります！」

これからも社長秘書としての責務を全力で果たす。秀美は心に誓った。

慧一の初対面での言動は、あくまでも冗談なのだと思いついて――

社長就任に関わる全日程は無事終了した。秀美は慧一とともにハイヤーで名古屋駅に向かい、東京行きの新幹線に乗り込む。他の重役とは別行動なので、二人きりの帰京である。

シートに並んで座ると、秀美はスケジュールアプリを開き、今後の予定について説明した。

慧一は身体ごとこちらを向き、黙って聞いている。うんともすんとも言わないので、秀美は心配になってきた。スケジュールに問題があるのかなと思いついて、彼の表情をそれとなく窺う。

「どこか不備があれば、調整いたしますが」

「いや、特には」

慧一はにこりと微笑んだ。不満のある顔ではない。

「それで、東京駅に着くのは八時半だけ？」

「午後八時三十三分です」

「今日は本社に寄らないんだな」

「はい。社長としての初出社は明日二十九日です。午前七時四十五分に運転手の友部さんが、ご自宅までお迎えに……」

「だったら、今夜飲みに行かないか」

「かしこまり……は？」

秀美はぼかんとする。流れるような誘いに、うっかり乗ってしまうところだった。

「飲み……って、私とですか？」

「ああ。二人きりで」

慧一が顔を近付けてきた。彼の黒い瞳に、秀美は閉じ込められてしまったように感じる。初対面の時の驚きと戸惑いがよみがえってきた。

「ど、どういふことでしょうか。なぜ私と？」

「見れば見るほど、君は美しい。さつきから俺は見惚れているんだよ」

「……」

またしても悪い冗談が始まった。これではまるで昨日の続きである。

「社長。あのですね……」

「白い素肌。艶やかな黒髪。ほっそりとした首筋。君のすべてが、日本女性のたおやかな美しさを体現している。女らしい色香に惑い、我を忘れそうだよ」

「う……」

褒めているつもりなのだろうが、秀美は恥ずかしくなってしまう。

もちろん、まともに受け取ってはいない。入社してからこっち、男性社員からの評価は一貫して『堅物眼鏡』あるいは『色気ナシの地味女』だ。からかうのもいい加減にしてほしい。

口ではうまく言えないので目で抗議する。しかし、敵の攻撃はさらに続いた。

「帰るには、まだ早いだろ。もう少し君と一緒にいたい」

上司が部下を誘う時の口調ではない。男が女を口説くための甘い囁きだと、男性経験がゼロに等しい秀美にも分かった。頭がくらくらして倒れそうになる。

何て不埒な男だろう。心底呆れてしまう。こんな人が社長だなんて信じられない！

「ご遠慮いたします」

秀美はきつぱりと断った。

「どうして？ 何か予定でもあるのか」

あるわけがない。仕事が終われば帰って寝るだけの枯れ女だ。でも——

「本日のスケジュールに、そのような予定は入っておりませんので」

「スケジュールって、飲みは仕事じゃないぞ」

「私はあなたの秘書です。個人的なお誘いは困ります」

「仕事を終えたら一人の女性だろ。とても魅力的な、ね」

「うぐ……」

齒の浮くようなセリフもアメリカ仕込みだろうか。秀美は全身が痒くなってくる。

「とにかく、からかうのはおやめください！」

秀美はぴしりと撥ねつけ、慧一の瞳から脱出した。もはや丁重にお断りする余裕などない。

「……仕方ないな。今夜はあきらめるか」

慧一は残念そうに呟くと、シートを倒して目をつむった。すぐに寝息を立て始める彼を見て、秀美はあんぐりと口を開ける。

（今夜はあきらめるって……これから先も、永遠にあきらめてください！）

さんざん人を振り回しておいて、勝手すぎるこの態度。やはり慧一は、秀美をからかっているだ

けなのだ。

西葛西のマンションに帰り着いたのは、午後九時半。秀美はコートのままソファに倒れ込む。たった二日間の出張なのに、世界一周でもしたかのようにヘトヘトだった。

(体力、精神力とも人並み以上のつもりでいたのに、トシなかしら……いや、違う！) カツと目を見開くと、ボストンバッグの横に転がる薔薇の花束を睨みつけた。

「桜山慧一、一体どういうつもりなのよー」

遮音性の高いマンションだから、少々叫んでも大丈夫。怒りながらも、そんなことを考える辺りが秀美だった。しかし、自分がこれほど興奮するのは珍しい。すっかり調子を乱されている。

「……ちよつとだけ飲もう。確か、いただきまものウイスキーがあつたはず」

コートと一緒にジャケットも脱いだ。三月下旬にしては気温が高く、半袖のブラウス一枚でちょうどいい。バレッタを外して結び上げた髪をほぐすと、少しリラックスした。

対面式キッチンに入り、冷蔵庫のハムとチーズで簡単なおつまみを作る。飲み物はウイスキーとジンジャーエールのハーフ・ロック。

「ふー」

リビングに戻ってソファに腰かけると、ひと口飲む。爽やかな喉ごしが気持ちいい。

秀美はたまに家飲みする。仕事の付き合いで飲むうちに、お酒の楽しみを覚えたのだ。

「うーん、やっぱりお家が一番」

七階建ての賃貸マンションに住み始めたのは三年前の春。二十六歳だった秀美は、特定の重役に付かないグループ秘書から、社長付第一秘書に抜擢された。給料が上がったので、少し家賃が高いところに引越したのだ。

通勤に便利だし部屋も広い。当時は贅沢な気がして落ち着かなかつたが、今ではゆったりとくつろげる『我が家』である。

手足を伸ばし、ちよつとだらしない格好でソファに寝そべる。一人暮らしの部屋は、オフィスと違って自分だけの空間だ。堅物眼鏡の社長秘書も、東の間のオフタイムに浸る。

「社長秘書……か」

秀美は起き上がると、ハーフ・ロックの残りを呷った。多少は落ち着いたものの、慧一を思い出すとやはりムカムカしてくる。こんな時は、精神安定剤が必要だ。

ずり下がった眼鏡の位置を直し、テーブル横のラックから一冊の本を取り出す。それを膝の上に乘せて、ハードカバーの表紙を眺めた。

——男の色気・魅惑の美尻写真集——

表紙をめくると、現れたのは男性の下半身。といっても、すっぽんぼんの危ない写真ではない。ストラックスやデニムを穿いた男性の、腰から尻にかけてのバックショットである。

秀美は重度のパーツフェチ——それも、お尻フェチなのであった。

「ああ、和むなあ……」

男達の逞しくもセクシーな腰つき。挑発的に突き出された臀部。見ているだけで心が安定し、元

気がもりもり湧いてくる。

なぜお尻なの？ と訊かれてもハッキリと答えられない。これはもう秀美の本能であり、生まれつきの感性なのだ。顔の良さや背の高さなどとは一切関係なく、強烈に惹かれてしまう。

「いつ見てもキレイだなあ。さすがモデルさんよね」

この写真集は海外から取り寄せたもので、モデルは外国人。いわゆるパーツモデルの男性達だ。遅く引き締まった下半身を主役に、オフィスや街中での日常的な動きを演出している。

インターネットで画像を探しても、これほどの逸品はなかなか見つからない。それどころか趣味に合わないお尻に遭遇し、がっかりすることもある。

同好の士が集まるSNSや掲示板を覗くとよく分かるのだが、同じパーツフェチでもそれぞれ好みがあって、尻なら何でもいいわけではない。

秀美の場合は鍛え上げられた腰回りと、引き締まった臀部がタイプである。中でもボクシングや空手など、格闘技で鍛えたものが最高だった。

そして、生尻よりも着衣の状態に萌える。想像力をかき立てられ、勝手に妄想できるからだ。

「ワイシャツにストラップスもセクシーだけど、Tシャツにデニムとか、作業服もいいのよね……」  
写真集をひと通り堪能すると、秀美はふうつと息をつく。

プロのモデル達は確かに魅力的だけれど、『彼』には敵わない——  
バッグからプライベート用のスマートフォンを取り出し、ロックを解除する。写真アプリを選び、暗証番号を入力して、嚴重に保護されたファイルを開く。

すると秀美の頬はみるみる紅潮し、瞳も潤んできた。

「ああ、私の究極の癒し……ストレスなんてどこかに吹き飛んじやう」

職場では絶対に見せない、蕩けそうな表情。秀美は『彼』を前にすると理性を失い、何もかも忘れてしまう。

「久しぶりに東海工場に行つて、思い出しちゃった」

画面に映っているのは、作業ズボンを穿いた男性の完璧なバックスタイル。その腰からお尻にかけてのラインにうっとりしつつ、あの夜の記憶をたどった。

入社二年目の初夏。東海工場にて、本社勤務の新人社員を対象とする研修が行われた。創業の地で会社の歴史を学び、製造の現場を見学するという内容だ。

日程は二泊三日。秀美を含む参加者達は、敷地内の研修施設で寝泊まりしていた。

二日目の夜。新人達は研修施設の食堂に集まり、意見交換会を開いた。とはいえ自主的な会なので監督者などいない。しかも男女合わせて三十人ほどの参加者は、二十代前半の若者ばかり。仕事の話題が尽きると雑談が始まり、いつしか合コンの様相を呈してくる。

「納谷さんって秘書課なの？ そのわりに色気がないし、お堅いよね。もつと愛想よくしなきゃ、重役サンに嫌われるぜ」

隣に座っていた男が、呆れたように言った。

「え……」

秀美が反応できずにいると、男はさっさと席を離れ、別の女の子とお喋りを始めた。

（失礼な！ っていうか、秘書を何だと思ってるの？）

秀美はノリのいい会話ができない。無愛想で堅苦しいし、色気がないのも認める。だけど、秘書の仕事をそんなふうに言われるのは心外だ。

意見交換会ならぬ合コンを途中で抜け出し、外の空気を吸った。

やっぱり男の人は苦手だ。自分はもう恋なんてしないでだろうと秀美は思う。

実は大学時代に、男性と付き合った経験がある。相手は商学部先輩で、自分と同じ堅物なタイプだった。二年ほど真面目に交際し、男女の関係も結んだけれど、互いにクールすぎたのだろう。

テンションを低めに保ったまま自然消滅した。

あれ以来、秀美は誰とも付き合わず、恋愛とは無縁の生活を送っている。

考えてみれば、元カレのお尻は今一つ好みではなかった。彼が素晴らしいパーツの持ち主なら、もつと好きになれたのかもしれない。

「なーんて、そんなの不純だよな」

苦笑したあと、小さく身震いした。梅雨の走りだろうか。長袖のトレーナーを着ているのに、肌寒く感じる。

秀美はふと思いつき立ち、ポケットから携帯電話を取り出すと、実家の短縮番号を押した。

「もしもし、秀美です。今、研修に来てるんだけど……」

電話に出たのは母親だった。八王子の実家には、両親と弟が暮らしている。

「うん、今夜は冷えるから温かくしてねって、お父さんに伝えて。心配しすぎ？ そんなことないって。とにかく、無理は禁物だからね」

二十年ほど前、秀美の父親は身体を壊している。今で言うブラック企業に勤め、始発で出勤して終電で帰る生活を続けた末、倒れたのだ。

その後は健全な会社に転職したのだが、寒い日などは体調を気にかけてしまう。

「それじゃ、もう切るね。はい、おやすみなさい」

父も家族も元気なようで安心した。時計を確かめると、午後九時を回っている。

「風が冷たい……あつたかいコーヒーでも飲もうっと」

第一加工部の工場内には売店があり、夜遅くまで開いている。消灯は午後十時なので、それまでに戻ればいいと考え、秀美は工場エリアへと歩き出した。

東海工場でも巨大なその建物は、闇に覆われていた。人の気配はなく、機械がフル稼働している昼間とは様子が違っている。

「夜の工場って不気味……あれ？」

売店に続く薄暗い通路は、片側の壁が工場見学のためのガラス窓になっている。広々とした工場内の一角にライトが点き、一人の男性が作業しているのが見えた。

「機械のメンテナンスかな？ こんな夜遅くまで大変だなあ」

何となく気にしながら売店に行くと、お客さんがいた。振り向いたその人を見て、秀美は反射的に背筋を伸ばす。東海工場の佐山工場長だった。

「おや、君は新人研修で来てる……確か、秘書課の納屋さんだね」

工場長は昨日今日と研修の講師を務めたので、参加した新人の顔や名前を把握しているらしい。

「どうした、意見交換会はもうお開きか？」

「いえ、ちよつと……温かい飲み物が欲しくて、抜けてきました」

「なるほど。そういえば、今夜は妙に冷えるな」

合コンまがいの雰囲気馴染めず逃げ出したとは言えない。秀美はレジに進み、コーヒーを注文した。

「もうすぐ店じまいなのよ。間に合つて良かったねえ」

売店のおばさんが明るく笑い、ドリップコーヒーを淹れてくれた。壁際のベンチに腰かけて、ふうふうと冷ましながらか飲む。自動販売機の缶コーヒーより、ずっと美味しい。

「そうだ！ 納谷さん、ちよつと頼まれてくれないかな」

工場長が急に大きな声を出すので、秀美はビクツとした。

「はっ、はい？」

慌ててベンチを立つと、ビニール袋を差し出される。中には、おにぎりとお茶が入っていた。

「工場で作業してる人に渡してほしいんだ。子会社から来た技術者んだけど、機械の修理がなかなか終わらないみたいでね、夜食の差し入れだよ。秘書課の新人なら適任だ」

「適任……ですか？」

秀美が聞き返すと、工場長は焦ったように手を振る。

「いやいや、何でもない。俺が行つてもいいんだけど、今ちよつと忙しくてさ。その通路のドアから工場に入れるから、頼んだよ。あ、くれぐれも失礼のないようにね」

彼はビニール袋を秀美に押しつけ、そそくさと出ていってしまった。不思議顔で見送る秀美の横で、おばさんもレジを締めながら首を傾げている。

「変な人だねえ。さつきまで暇そうにしてたのに」

「そうなんですか？」

佐山工場長の言動は謎だが、与えられた仕事は全うすべきだ。

（お茶出しも秘書の大切な仕事ってことかな？ まあ、これも研修の一環と思えば……）

秀美は売店を出て通路に戻り、工場に入るドアを開けた。研修で見学した際に習ったとおり、棚に設置されたヘルメットを被ってから、グリーンの床に足を踏み入れる。

大型の加工機械が両側にそびえ、その影が通路に落ちている。ライトが照らす場所へ、秀美はゆっくりと歩いた。

技術者というのは、つまり職人である。工場長が『失礼のないように』と念を押すくらいだから、かなりベテランで気難しい人なのかもしれない。

その人はこちらに背を向けていた。カバーを外した機械の前にしゃがみ込み、何やら作業している。秀美がライトの下に入ると、気配を感じたのか、技術者がサツと振り向いた。

帽子を被り、ゴーグルと保護マスクも着けているので顔が見えない。

「お仕事すみません。私は桜山製作所の本社秘書課に所属する、納屋と申します。佐山工場長か

らの差し入れをお持ちしました」

秀美は丁寧に自己紹介した。気難しい職人が相手だと思おうと緊張してしまう。

「それは、わざわざありがとうございます」

技術者は立ち上がり、ぺこりと頭を下げた。ずいぶんと背の高い人だ。

声と雰囲気から、若い男性であることが窺えた。ある意味、気難しい職人よりも苦手な相手である。差し入れを置いたらすぐに立ち去ろうと思ひ、秀美は適当な場所を探す。

「ちよつと待った！ 下手に動くといけないから、その辺に置いてください」

「あつ、ごめんさい」

秀美は足を止めて周りを見回す。床にはたくさんの工具や部品が並べてある。転んで怪我などしたら大変だ。

傍らにパイプ椅子を見つけ、その上にビニール袋を置いた。

「ここでいいでしょうか」

「はい、大丈夫です。ところで納谷さん」

早々に立ち去ろうとする秀美に、彼が話しかけてきた。そちらに向き直ると、ゴーグル越しにじつと見つめられる。とても熱心で、意味ありげな眼差しだった。

「な、何でしょうか！」

この人も若い男性だ。秀美は合コンの空気を思い出し、つい身構えてしまう。しかし、彼は予想と違うことを口にした。

「本社の秘書課ということは、もしかして研修中の方ですか？」

思わぬ質問に戸惑いつつも、彼の口ぶりが真面目なので、秀美も真面目に答える。

「はい。新入社員研修で東海工場に來ています」

「なるほど」

気のせいかな、嬉しそうな声に聞こえた。

「秘書の仕事は厳しいけれど、やりがいがあると聞きます。頑張ってください」

「あ、ありがとうございます」

同期の男達と違って、彼は秘書の仕事をきちんと理解してくれている。元気で爽やかな声に、秀美は励まされた。

「あの……夜遅くまで大変ですね」

今度は自分から話しかけた。若い男性は苦手なはずなのに、もう少しだけ彼と話したいと思ったのだ。彼は機械に向きかけた身体を、半分こちらに戻して答える。

「大変ってほどじゃないな」

手袋を外すと、加工した部品を拾い上げ、ヤスリで磨き始めた。言葉遣いがラフになっている。

「朝から晩まで働き詰めだが、仕事が好きだし、あまり苦にならない。それに、責任もあるからね」

彼の口ぶりから、嘘は感じられない。でも、秀美はかえって引っかけかりを覚えた。父も倒れる直前まで、同じことを言っていたのだ。

「お身体、辛くないですか？」

「それなりにね」

秀美は微かに眉をひそめた。部品を丁寧に磨く彼の手には、すり傷がついている。

「いくら仕事がお好きでも、長時間労働で身体を酷使するのは……」

彼が部品から目を上げた。ゴーグルとマスクのせいで、表情が読み取れない。

「これくらい何てことないさ。例えばこの会社——桜山製作所の創業者は誰よりも早く現場に入り最後まで残って仕事をしたという。そうやって寝る間も惜しんで働いたからこそ、小さな町工場が、世界に通用する大企業に成長したんだよ」

まるで小さな子どもに言い聞かせるような話し方だ。秀美はますます父を思い出し、ムキになってしまふ。

「その顔は、異論がありそうだな」

「はい。生意気かもしれませんが。でも言わせてください」

「どうぞ」

彼は聞く体勢をとった。研修中のひよつこに、真摯に向き合ってくれている。

「経営者の役割は、二十四時間働くことではなく、密度の濃い仕事を見せること。そして優秀な人材を育てて適材適所に配置し、生産性を上げることだと考えます。そのために大切なのは、徹底したスケジュール管理。個人の能力や体力を考慮し、無理のない予定を立てるのです。それは大企業でも町の小さな工場でも変わりません。経営者自らが実践すれば、社員の労働環境はおのずと整うのではないのでしょうか」

「それは現実的ではない、ただの理想だね」

彼はバツサリと斬り捨てたが、秀美は負けない。どういうわけか珍しく興奮していた。

「信念を持って努力すれば、理想は必ず実現します。私は秘書として、スケジュール管理を徹底することで社長を支えたい。それはいずれ、この会社で働くすべての人のためになると信じています」  
いつかは社長秘書になる——ひよつこが語る大それた未来を、彼は茶化すことなく聞いている。

「だから、私は秘書の仕事を選んだのです！」

過労でポロポロになった父の姿が忘れられない。秀美には労働環境の改善に対する強い思いがあった。生半可な気持ちで秘書を希望したのではない。

「この会社で働くすべての人のために……か」

彼が発した声で秀美は我に返る。新人のくせに、偉そうに演説したことが恥ずかしくなった。

「すみません！ 本当に生意気でした」

「……」

彼はゆつくりと近付いてきた。安全靴の重そうな足音が、静かな工場に響く。

もしかして怒ったのだろうか。秀美はその場から動けず、怯えながら彼の姿を見つめた。

ライトグリーンの作業服。胸元には赤い糸で『Mino Parts Industry』と会社名が刺繍されている。

彼は目の前で立ち止まり、大きな手を秀美のヘルメットにポンと置いた。

「なかなか骨のある新人だ。感じ入ったよ」

秀美はそっと彼の顔を覗く。ゴーグルの内側で、黒い瞳がキラキラと光っているのが分かった。

「……また、お会いできますか？」

秀美は自分の発言に驚き、かあつと赤くなる。一体、何を口走っているのか。

「ああ、いつかまた。そうだな……君が社長秘書になった頃に」

彼は笑わず真面目に答えてくれた。社交辞令だとしても、とても嬉しい。

「はい、必ず！」

「楽しみにしてるよ。ありがとう」

彼はこちらに背を向け、機械の修理に戻った。作業台からコテらしき道具を取り、上半身を前に倒して、部品を取り付けにかかる。

（ありがとう……つて？ あ、差し入れのことかな？）

首を傾げていると、ポケットの中の携帯電話が震えた。慌てて取り出してアラームを止める。

「消灯まであと十五分。もう行かなくちゃ……ええと」

そういえば、まだ彼の名前を聞いていない。でも今さら尋ねるのも変なので、名残惜しく思いつつ彼を見やった。

「あっ……」

その場でピタリと固まり、動けなくなってしまう。作業中の彼の姿に、秀美の目は釘づけになった。（う、嘘……ちよつと、待つ……）

前屈みになっているため、上着がずり上がっている。そのせいで、腰とお尻のラインが丸見えだ。写真集のパーツモデルに勝るとも劣らぬ素晴らしい臀部。いや、それ以上の艶めかしさに、強烈

な刺激を受ける。あまりにも見事なバックスタイルに驚愕し、震えが止まらなかった。

（ど、どうしよう。この人のお尻すごい。もつと近くで見たい。でも、そんなこと……）

作業ズボンに包まれた逞しい腰、力の漲るお尻。いけないと思いつながら、秀美は一步二歩と前に進んだ。

そして、震える手で二つ折りの携帯電話を開き、カメラを起動する。

ピロリン——

軽やかなシャッター音が工場内に響いた。意外なほど大きな音が出て、自分でもびっくりしてしまう。彼にも聞こえたらしく、上半身を起こし、こちらを振り向こうとしていた。

（わ、私ったら何てこと……逃げなきゃ！）

大慌てでポケットに携帯をねじ込む。ガラスビーズのストラップが引っかかり、紐が切れて床に落ちてしまったが、構っていられない。後ろを振り返らず、急ぎ足で出口に進んだ。

彼の声が聞こえるけれど、何を言っているのか分からない。罪悪感と恥ずかしさ、喜びと興奮。あらゆる感情に混乱しながら、秀美は工場を脱出した。

翌日、研修を終えた新人達は施設の前に集まり、佐山工場長と世話役の先輩社員に挨拶をした。挨拶が済むと、工場長が秀美に近付いてくる。

「やあ、納谷さん。昨夜はどうもありがとう、助かったよ」

「工場長、あの……」

秀美は思いきって『彼』の名前を尋ねてみた。どうしても気になって仕方がなかったのだ。「昨夜の技術者？ うーん……彼はねえ」

工場長は困ったように頭をかいた。桜山製作所の関連会社『美濃部品工業』の社員であること以外、よく知らないという。

そんなことがあるだろうか。秀美は納得できなかったが、工場長が嘘をつくとも思えない。

「名前は何だったかなあ。いつもの技術者が休みで、その代理で来てくれたんだよ。それに近々転職するから、昨夜が最後の仕事だとか言ってたぞ」

「ええっ！ 転職って、どこにですか？」

「個人情報だからねえ。そこまで訊けなかつたよ」

秀美は呆然とした。一つも手がかりを残さず消えてしまうだなんて。

「ただ、確かに彼は『また会える』と言ってくれた。秀美が社長秘書になった頃に——と。」

（あれはただの社交辞令？ でも、口先だけの人には思えない）

狐につままれたような気持ちだった。

——あれから六年の年月が流れた。

自分は夢でも見たのだろうか。時が経つほど現実感が薄れるけれど、携帯電話には彼の完璧なバックショットが残っていた。誤って削除しないよう慎重に扱い、スマートフォンに機種変更した後も、データを移して保護している。誰も知らない、秘密の宝物だった。

「私、社長秘書になりましたよ。あなたはどうしていますか？」

仕事で辛いことがあっても、『彼』を觀賞すれば秀美は元気になる。秀美にとって『彼』は理想的なパーツの持ち主であるとともに、忘れられない男性だった。

「はあ……それにしても」

写真アプリを閉じると、ため息をついた。社長秘書になったのはいいが、今はその『社長』に悩まされている。

（まったくもう。秘書を口説くなんて、セクハラと。パワハラのコンボでしょ。訴えてやろうかしら）  
「ただ……と冷静に考えてみる。前社長の桜山会長は厳格な人だ。その息子である慧一が、忝からふざけた人間とは思えない。」

——未熟な若社長を、君がサポートしてやってくれ。

秀美はソファから立ち上がり、薔薇の花束を拾い上げる。いかにも高そうな真紅の薔薇だ。

経費ではなく自腹で買ったのだろう。桜山慧一は不埒な男だが、決してけちではない。それは仕事を通して多くの人間を見てきた秘書としての直感だった。

一応、薔薇は飾っておくことにする。戸棚を開けて花瓶を探していると、着信音が鳴った。テーブルの上で、仕事用のスマートフォンが震えている。

「うわあ……」

発信者の名前を見て、秀美は眉根を寄せた。しかし、仕事に私情を挟むのはご法度。軽く深呼吸してから、通話ボタンをタップする。

「納谷でございます」

『こんばんは。まだ起きてたのか』

慧一の低くて男らしい声が聞こえてくる。彼のふるまいを知らなければ、硬派なイメージを持つだろう。

「はい。この時間でしたら、たいてい起きております。何かございましたでしょうか？」

『いや、どうも眠れなくてさ。君の声を聞きたいと思ったんだ』

「……」

秀美は花束をグッと握りしめ、仕事、仕事と頭の中で念仏のように唱える。

『どうした、感激してるのか』

クスクスと笑う声が出て、秀美の精神は早くも限界を迎える。この社長にかかるとたちまち興奮し、クールな態度を保てなくなってしまう。

「社長、おふざけにならないでください。私まで眠れなくなりそうです」

『それはすまない。でも、俺はリラックスできたよ。ありがとう』

何を考えているのかよく分からないが、眠れないというのは嘘ではなかったらしい。さすがの彼も、社長としての生活が始まったばかりで緊張しているのだろうか。

「リラックスされたのなら何よりです。それでは、ごゆっくりとおやすみください」

『君も眠れないなら、薔薇の花を数えるといい』

秀美はドキッとした。今まさに、慧一から贈られた薔薇の花束を手に入れている。どこから覗い

ているのでは？ と不安になって部屋を見回すが、いくら何でもそれはあり得ない。

「薔薇……ですか。では、そういたします」

余計なこととは言わず、努めて冷静に返事をする。ちょうど飾ろうとしていたところですからなんて教えるのは、何だか悔しい。

『それじゃ、また明日。おやすみ、俺の秘書さん』

「お、おやすみなさい。失礼いたします」

含みのある呼び方に動揺し、思わず囁んでしまった。スマートフォンに表示された通話時間は一分五十秒。仕事以外の用事で電話をかけてくるとは、まったく困った社長である。

「時間の無駄遣いだわ……はあ」

秀美は戸棚から花瓶を探し出すと、水を張ったバケツとハサミを用意する。そして薔薇の茎を斜めにカットし、水切りしながら生けた。手間はかかるが、こうすると花が長持ちするのだ。

新人の頃は、社長室に花を飾るのが日課だった。初心を思い出し、秀美は少し懐かしくなる。

「それにしても、豪華な花束。何本あるのかな」

本数を数えるのは、純粹な興味からだ。決して彼に言われたからではない。

そんな言い訳じみたことを考えながら、秀美は「二十二、二十三……」と数えていく。

「九十九……あれ？」

キリよく百本かと予想したのに、ずいぶん半端な数だ。

「一本数え損ねた？ ううん、確かに九十九本だった」

きつと花屋に在庫がなくて、一本足りないまま花束を作ったのだ。つまり慧一の秀美に対する気持ちはそのていどであり、豪華な贈り物にも深い意味はない。秀美はそう推測した。

「ふああ……数えたらホントに眠くなってきた」

チェストの上に花瓶を置くと、飾り気のない部屋が急に華やかになる。

秀美はどこか拍子抜けした思いで、真紅の薔薇を見つめた。

新社長が初めて出社する今日、朝礼でセレモニーが行われる。その後も重役会議、執行役員との面談と、分刻みのスケジュールが続く。業界紙など、メディアの取材も受ける予定だ。

社長付第一秘書の秀美も、目が回るような忙しさになるだろう。

「気合を入れて、頑張らなきゃ」

いつもより一時間早く起きて、身支度を整える。

化粧は普段どおり地味な色合いだが、崩れにくいよう下地から丁寧に施す。化粧直しする時間を節約するためだ。カールした髪はほつれにくいように編み込み、アップスタイルにする。黒のパンツスーツに着替え、レンズを磨き上げた黒縁眼鏡をかければ準備完了。

「よし、行つてきますす！」

早めにマンションを出て、駅に向かってまっすぐ歩く。雲一つない青空がまぶしい。

電車に乗ると、新社長のデータを頭の中で再確認した。

桜山慧一。十二月一日生まれ。三十二歳独身。身長一八五センチ。体重七十八キロ。墨田区

東向島のマンションで一人暮らし。食事は基本的に外食。掃除や洗濯などの家事は桜山家のベテラン家政婦に任せている。好きな食べ物は寿司、天ぷら、果物。アルコールでは特にウイスキーを好む。趣味はドライブ、模型作り、スポーツ、音楽鑑賞など。

(国内外に友人は多いが、現在交際の女性はいない……ホントかしら)

秘書は業務上、社長のプライベートや趣味嗜好を把握する必要がある。データは秘書課の上司と共有しているので、情報に誤りはないはず。

しかし、恋人の一人もいないというのは不自然な気がする。アメリカにいた時も、特定の女性と付き合うことはなかったようだ。

あんなチャラ男なのに、なぜ？ それとも、チャラ男というのは秀美の主観にすぎないのだろうか。男性経験がゼロに等しい枯れ女には謎だった。

(まあ、その辺りは置いといて。ええと、最終学歴は東名大学経済学部経営学科。卒業後は……) 慧一は大学卒業後、桜山製作所の子会社であるキタジマ機械工業に就職した。技術者として経験を積みたといと、本人が希望したそうだ。

桜山製作所に入社したのは六年前。その半年後、二十六歳の誕生日に、米国にある子会社サクラムヤマエンジニアリングアメリカに出向した。生産拠点のミネソタ工場で二年間工場長を務めた後、総務・管理部長の職を経て、北米支部統括兼事業本部長という大役を任される。

そして渡米五年目の夏、現地工場の経営を立て直すという使命を果たした。

前社長が退任の意思を示したのは、その直後のこと。次期社長候補の筆頭はもちろん、御曹司で

ある慧一だった。

若すぎると反対する者もいたが、米国における彼の実績は申し分なく、取締役会で三分の二の賛成を得て次期社長に選ばれた。前社長が会長として彼をバックアップするという条件付きではあるが。

そんなわけで慧一は、帰国前から仕事ができると評判だった。だから秀美は、前社長と同じ厳格な人柄を想像していたのだが……これまでの彼の言動を思い返し、こめかみを押さえる。

若くしてトップの座に就くイケメンハイスベック。今後は業界のみならず、世間一般の注目を浴びることが予想される。特に、若い女性達は色めき立っただろう。

(桜山の名を貶めないよう、ふるまいには十分注意してもらわなければ)

データの確認を終えたところで、秀美は電車を降りた。本社の所在地は江東区新砂。駅から徒歩五分で二十階建ての社屋に到着する。

秀美は上階用エレベーターに乗り、十九階の重役室フロアに直行した。

秘書課のオフィスに入ると、上司以外の課員が既に揃っていた。ちなみに秀美も入れて十名いる課員のうち、七名が女性である。気のせいかな、今朝はいつもより華やかな雰囲気だ。

(皆、メイクが心持ち派手なような……まったくもう)

「納谷先輩、おはようございます！」

元氣よく挨拶してくれたのは、入社三年目の三浦利絵。グループ秘書の一人だった彼女は、今日から社長付第二秘書の任に就く。ありていに言えば、第一秘書である秀美の助手だ。

持ち前のガッツと機動力で仕事をこなす三浦は、秘書課には珍しい体育会系女子だった。そんな彼女を第二秘書に推薦したのは、他ならぬ秀美である。

「おはよう、三浦さん。張り切るのはいいけど、声は控え目にね。あと、『先輩』はやめて」

「はいっ！ あ、すみません。納谷……さん」

元氣すぎるのが玉に瑕だが、頼りにしている。それに、彼女だけは化粧も普段どおりだった。

しばらくすると上司が出勤してきた。頭髪の薄い小太りの男性は小田課長。その後ろから入ってきた女性は井本主任だ。

三十八歳の彼女は経験豊富なベテラン秘書であり、英語と中国語の他、複数の外国語を操る。社長をはじめ重役が海外出張する際は、必ず同行していた。

井本は緊張の面持ちで席に着くと、秀美を手招きする。

「社長が到着されるのは二十分後ね。セレモニーの準備はどう？」

「はい、整っております。先ほど総務部の担当者に、最終確認をいたしました」

井本は「結構」と頷き、それから思いついたように手を打つ。

「あなた、名古屋で社長にお会いたのよね。ひと言で表現すると、どんな方だった？」

オフィスが急に静かになり、女性陣の耳目が秀美に集中する。

「そうですね……」

ひと言で表現するなら『チャラ男』です——

そう言いたいところだが、あくまでも秀美の主観であり、そのまま伝えるのはどうかと思う。

「社長は堂々としたお方です。前向きで、自信にあふれていて……」

嘘ではない。社長就任の挨拶は立派だったし、あらゆる方面に前向きで、自信にあふれている。「なるほど。さすが会長のご子息だわ」

主任が感心するのを見て、秀美は胸を撫で下ろす。無難すぎる答えに女性社員達は不満げだが、これでいいのだ。

「そういえば、会長は今日から海外視察なのよね。せっかくのセレモニーなのにねえ」

残念そうな井本に、小田が横から声をかける。

「入社式には会長も出席されるよ」

「あつ、そうか。来週は入社式だったわね」

春は何かと忙しい季節である。社長も秘書も、落ち着くまで少し時間がかかりそうだ。

「それでは主任。私と三浦さんは先に玄関に向かいます。社長をお出迎えて、セレモニー会場にご案内いたします」

「ええ、お願いね。私と小田課長もすぐに下りるわ」

秀美が三浦を連れてオフィスを出ると、社内放送が流れ始めた。

《本日は臨時朝礼を行います。社員の皆さんは、二階の大ホールに集まってください——》

それを聞きながら、エレベーターで一階に下りた。じきに小田と井本もやってきて、四人は玄関前で待機する。総務部からも課長と社員数名が来ていた。

待つこと十分。社長を乗せた黒のベンツが、ビルのロータリーにゆっくり進入してきた。時刻は

到着予定の午前八時ちょうど。幸先のいいスタートと言える。

秀美は車の脇に控え、運転手の友部が後部席のドアを開けるのを見守った。

「皆さん、おはようございます」

慧一の張りのある声が、玄関ホールに響きわたる。

彼は車から降り立つと、出迎える社員達に笑顔を見せた。

「おつ、おはようございます！」

社員達が一斉に頭を下げた。社長から先に挨拶されてしまったので、皆慌てている。

髪をきれいに整え、高級スーツを着こなす青年社長。若く凛々しく爽やかなその姿は、太陽のように辺りを照らす。社員達はまぶしそうに目を細めた。

「やあ、納屋君。今日もよろしく」

「よろしく願っています」

秘書として、社長とごく普通の挨拶を交わす。クールに構える秀美だが、内心ホツとしていた。初対面と同じようなふるまいをされたら困ってしまう。

「セレモニーの準備が整っております。二階の大ホールへどうぞ」

「分かった」

会場に案内しようとする中、総務課長が慧一の傍に来て、段取りを伝えながら歩き始める。秀美は三浦とともにその後を追った。

「威張ってるわけじゃないのに、すごいオーラですね。まるで一流のスポーツ選手みたいな」

三浦が小声で話しかけてくる。今のたとえは的を射ていると秀美は思った。ビジネスは格闘技に似ている。強敵が立ちはだかる闘技場で彼は戦い、いくつもの死闘を制してきたのだろう。その自信がオーラとなって、彼を輝かせているのだ。

「かつこいいなあ。ストイックで硬派な方なんでしょうね」  
「……」

それには同意しかねる。本当にストイックで硬派なら良かったのだけれど。ふと、一人の男性が頭に浮かんだ。六年前、夜の工場で出会った謎の技術者。『彼』なら、今の表現に当てはまるかもしれない。

秀美はぶんぶんと頭を横に振った。余計なことに気を取られ、仕事をミスしたら大変だ。気を引き締め、慧一の歩調に合わせてきびきびと歩いた。

セレモニー会場の控え室に着くと、総務課長が秀美達のほうを振り返った。

「あとは我々で段取りしますので、秘書課の皆さんは社員席にお座りください」

「それでは、よろしく願います」

そう言つて慧一を見ると、姿見の前に立ち、ネクタイを直している。総務部の女性社員がその周りを囲み、うっとりとした表情で見惚れていた。

「すごい！ 早速モテモテですね」

「……行くわよ、三浦さん」

ステージの前には、社員用のパイプ椅子が並んでいる。前列に空席を見つけた秀美は、三浦と並んで座った。周りはなぜか女性社員が多く、化粧と香水の匂いでむせ返りそうになる。

（やっぱり昨日までのあれは、冗談だったのね）

今朝の慧一は、秀美に対して妙なアプローチをせず、普通になるまわっている。いや、むしろ素っ気なく思えるほどだ。他の女性社員にも紳士的に接していた。チャラ男とはほど遠い、真面目な青年社長といった感じである。秘書としてはありがたいことだと思う。

しかし、どうにも解せない。昨日までの不埒な態度は何だったのか。

あの人は一体、何を考えているのだろう――

「ねえねえ、さつき廊下で社長をチラッと見かけたんだけど、マジで素敵だったよー」

「ええっ、いいなあ。私も早く見たーい」

「幻の御曹司を、ついにこの目で確かめられるのねー」

女性社員達の弾んだ声が後ろから聞こえた。まるで芸能人の噂話をしているようだと思美は眉をひそめる。ステージが近い場所に女性が集中しているのは、桜山慧一を間近で見るとためらい。彼女達にとって、慧一はまさにアイドルなのだ。

「幻の御曹司って、何だかツチノコみたいですね」

隣の三浦が面白そうに囁く。ミィハーな騒ぎ方に呆れるが、社長を未確認生物扱いするのもどうかと思う。秀美が私語を慎むよう注意すると、三浦は「スママセン」と首をすくめた。

その背後では、噂話ますます盛り上がっている。

「社長って独身なんだよね？ 私達にも玉の輿こしのチャンスがあつたりして」

「えー？ それはさすがに無理でしょ。ああいう人達は庶民なんて相手にしないって」

「でも可能性はゼロじゃないしー。もし結婚できたら、シンデレラウエディングよね」

「——ウオッホン！ 君達、静かにしなさい」

夢見る乙女達の妄想を打ち破つたのは、男性社員の咳せき払いだった。口調から察するに、彼女達の上司らしい。ようやく噂話うわさばなしが収まり、秀美はやれやれと息をついた。

（それにしても、シンデレラウエディングか……私には理解できないわ）

魔法をかけられ美しくドレスアップした娘が、舞踏会で王子様に見初められるというおとぎ話。

ロマンティック要素満載のストーリーは、世界中の女性に愛されている。

しかし秀美には、シンデレラの行動が理解不能だった。魔法が解ける時間を忘れるなんて信じられない。魔法使いが前もって告げたはずなのに、何を聞いていたのだろう。

彼女を深夜まで拘束する王子も王子だ。夜中の十二時といえば、秀美のスケジュールでは就寝時間である。寝不足は翌日の仕事に悪影響を及ぼすだろう。

（人間、理性を失ってはダメね。大事な場面でミスをすることになるわ）

「そういえば、東海工場の同期に聞いたんだけど」

「えっ、なにに？」

上司に叱られ一日静かになった女性社員達が、再びお喋りしゃべりを始めた。いい加減うんざりした秀美は、後ろを向いて注意しようとしたが……

「桜山社長が、秘書に薔薇ばらの花束を贈ったんだって」

ハッと息を呑み、斜めにした身体をゆっくりと元に戻す。

「ふうん。単なる挨拶あいさつじゃないの？」

「それが、恋人に贈るような豪華な花束だったらいいのよ。そのあと、手を繋いで歩いたとか何とか」冷や汗がだらだら流れる。あの東海工場での出来事が、こちらにも伝わっていたとは。

「ええー？ でも、社長秘書ってあの人でしょ。お堅いことで有名な……ほら、何て言ったっけ」

「ああ、納屋さんね。仕事大好きな堅物眼鏡かたぶつめがねって呼ばれてる」

「なーんだ。じゃあ、やっぱりただの挨拶あいさつじゃん」

彼女達は冷笑した。周囲一帯に、白けた空気が漂ただよっている。

「あなた方、失礼じゃないですかっ」

いきなり立ち上がり、声を上げたのは三浦だった。彼女はまっすぐな性格で、悪口が許せないタイプだ。先輩を悪く言われてカツとなったのだろうが、ここは抑えてほしかった。

「あれっ、あなた秘書課の……えっ、そこにいるのは納谷さん？」

もうすぐセレモニーが始まる。騒ぎなど起こして式の進行を妨またげてはならない。秀美は椅子から立ち上がると、何か言おうとする三浦を制し、身体を真後ろに向けた。

女性社員達はメドゥーサに睨にらまれたかのように固まっている。そんな中、東海工場とうかいこうじょうでの噂うわさを口にした社員が、おずおずと言いつつ述べた。

「すっ、すみませーん。たぶん、同期の見間違いだと思います。納谷さんのような真面目な方に限っ

て、あり得ませんよね」

ある意味失礼な発言だが、彼女は謝罪しているつもりらしい。

（こうなったら仕方ない。社長の真意はともかくとして、私の態度だけはハッキリさせておこう）  
浮いた噂の一つもない枯れ女。男性社員には、仕事と結婚したと陰で揶揄されている。

六年前の新人研修の夜から、何も変わらぬ。仕事と関係のない誘いはすべて断ってきたし、これからもそのつもりだ。そう、相手が誰であろうと。

すうつと息を吸い込むと、秀美は涼やかな笑みを浮かべて言った。

「皆さんの推測どおり、社長は私に挨拶をしてくださったの。部下に花を贈るのは欧米では珍しいことではないし、そこに特別な意味などありません」

欧米云々はでませだが、そういうことにしておく。大体、九十九本なんて半端な数の薔薇に、特別な意味などあるわけがない。

「それじゃあ、手を繋いだというのは……」

「握手の一種です」

「そういうものなんですか？」

「ええ、そういうものです！」

質問は一切受け付けませんとばかりに、秀美は眼力を強くする。

女性社員達は秀美の迫力に気圧されたのか、お喋りをやめて大人しくなった。

タイミングよく流れ始めた音楽が、セレモニーの開始を告げる。秀美は前を向き、背筋を伸ばし

てきちんと座り直した。三浦が「さすが先輩！」といった顔でこちらを見ている。

（やれやれ……秘書の仕事より疲れるわ）

冷や汗を拭いつつ、あのセリフまでは伝わっていないようだ、と、秀美は安堵していた。

——心を込めて贈ります。どうぞよろしく、俺のお姫様。

主役の桜山慧一が登場すると、会場は大きな拍手に包まれた。周囲の女性社員はアイドルコンサートのノリで盛り上がっている。

（社長、お願いします。ゴシップのネタになるような行動は控えてください！）

慧一の滑らかなスピーチを聞きながら、秀美は切に願った。

セレモニーが終わると、秀美は慧一を社長室に案内した。三浦がお茶を用意してくれている間に、本日のスケジュールをプリントアウトして慧一に手渡す。社長専用端末に入っている共有スケジュールにも同じデータを送り、操作方法を説明した。

「このように、スケジュールは私が作成しております。なお、プライベート及びコンフィデンシャルな予定は表示されません。それらにともなう調整が必要な場合は、都度お知らせください」

「なるほど、これがかの有名な納谷式スケジュール管理か。君が社長秘書に起用されるきっかけになったという」

「恐れ入ります」

まだグループ秘書の一人だった頃、役員のスケジュール作成をたびたび任せられた。細やかな仕事

ぶりが役員の間で評判になり、それがきっかけで秀美は社長秘書に抜擢ぼつてきされている。

『納谷君の予定表は完璧で無駄がない。しかも、どういうわけか体調が良くなる』

役員達がそう感じていたのには明確な理由がある。

秀美は日頃から役員一人一人の行動パターンを手帳しよちに記し、データを集めていた。それを利用して作ったものが納谷式スケジュールなのである。

例えば、トイレに近い役員の場合には会議の前後に時間的余裕を持たせるなど、体質に合わせた工夫をした。秀美にとってスケジュール作成は、体調管理の一環でもあるのだ。

もちろん、上手に予定を組むだけでは社長秘書は務まらない。総合的な能力を評価された結果だと、秘書課の誰もが納得してくれている。

「素晴らしいね、さすがだ。君ならやれると信じていたよ」

「……え？」

秀美は微かな違和感を覚えた。まるで、前から期待していたかのような発言だ。

慧一は秀美の顔をじっと見つめている。熱のこもった瞳は、何らかの反応を期待していた。でも、どう反応すればいいのか秀美には見当もつかない。

こうして秘書になるまで、彼に会ったことなど一度もないのだから。

「失礼します！」

元気な声が響き、三浦が入室してきた。社長室のドアは基本的に開け放されている。

慧一はようやく視線を秀美から外し、デスクにお茶を置く三浦に声をかけた。

「ありがとう。君は三浦君だったね」

「はいっ。社長付第二秘書の三浦利絵です。よろしくお願ひします！」

緊張のためか、いつにも増して声が大きい。秀美はハラハラするが、慧一は明るく笑った。

「君は体育会系だな。俺と気が合いそうだ」

「ありがとうございます！」

そういえば二人とも声に張りがあり、動作もキビキビしている。運動部の先輩後輩のような、ちよつと暑苦しい組み合わせだと秀美は思った。

「ひと息入れたら、すぐに仕事を始める。二人とも、よろしく頼むぞ」

引き締められた表情は凜々りんりんしく、どこから見ても硬派な男性だ。秀美はさっきの違和感を忘れ、社長業に取り組む彼をフォローした。

午後七時。仕事を予定どおりに終えた慧一は、椅子の上で大きく伸びをした。

「思ったより早く片付いたな。さぞかし仕事が溜まっているだろうと覚悟していたが、意外とそうでもなかった」

椅子ごとくるりと反転し、ロールスクリーンを全開にした窓から夜景を眺める。

秀美はデスクの脇に控えたまま、彼の横顔をそれとなく窺うかがった。

疲勞の色は見えず、余裕の笑みが浮かんでいる。若いだけあってタフなのだ。仕事のできる男が皆そうであるように、精神力も強いのだろう。

「会長がギリギリまで社長代理を引き受けてくれたおかげだ」

ほんの少し声のトーンが落ちた気がする。しかし、椅子を戻した慧一の顔は明るかった。

「ところで納谷君、花は何本だった？」

「……？」

突然質問されて秀美は戸惑う。

「俺が君に贈った、薔薇の花束だよ」

その言葉を聞いて、昨夜の電話をハッと思い出す。

「しょ、少々お待ちください」

部屋の入り口へ足早に向かい、外を覗いた。社長室の前にはフロントと呼ばれるスペースがあり、秘書席が設置されている。デスクをパーテーションで囲っただけの開放的な空間だ。秀美は三浦と交代で席に座り、電話や来客の対応をしていた。

その三浦は夕方から秘書課オフィスに入っているの、フロントには誰もいない。秀美は迷ったが、結局ドアは開けたまま急いで中に戻った。外に声が漏れることより、密室で二人きりになることを危惧したのだ。

「どうしたんだ、そんなに慌てて」

とぼけた顔で訊く慧一が憎らしい。今日一日、社長業を真面目にこなす姿を見て、秀美はすっかり油断していた。やはり、桜山慧一はふざけた軟派男なのだ。

「社長。仕事に関係のない話はおやめください」

「前の社長と違って、雑談くらいしただろう」

「会長は秘書を口説くような真似などなさいませぬ」

仕事ができるという点は共通するが、彼ら親子の気質は真逆。言うなれば、硬派と軟派である。

「なるほどね。で、花は何本だった？ 君のことだから、律義に数えたんだろ」

「う……」

悔しいけれど、そのとおり。なぜここまで行動を読まれてしまうのか不思議だった。

「……九十九本でした」

「それで？ 俺の気持ちは分かってくれたんだろ」

「はい？」

意味を取りかね、秀美は彼を見返す。

（俺の気持ちって……あの中途半端な数の薔薇が、私に対するメッセージってこと？）

「一本足りないけどまあいいや——という、適当なお気持ちですね」

こんなことをわざわざ答えさせて、どうするつもりだろう。秀美は意外なほどの苛立ちを覚えた。

「何だって？」

慧一の眉がピクリと動く。彼は心外といった顔で立ち上がり、大股で近付いてきた。

「え、あのっ？」

「……まったく。勝手な解釈をして」

秀美を見下ろし、大きなため息をつく、デスクの上からスマートフォンを取り上げた。

「ほら、少しは調べてみる」  
「は、はあ」

差し出されたのは、彼のプライベート端末だ。

「薔薇・花東・九十九本がキーワードだぞ」

「はい。ええと……」

言われるままネット検索をかけると、いくつかのサイトがヒットした。九十九本の薔薇で作られた花東。その意味するところは――

《永遠の愛》

《ずっと好きだった》

自分の解釈と真逆の結果が出てきて、秀美は首を傾げる。

「分かっただろ？」

「ええ……つと、一体どういうことなのか、私にはさっぱり……」

慧一は絶句している。でも、秀美は正直に言っただけなのだ。

（永遠の愛だなんて唐突すぎるでしょ。ましてや、ずっと好きだったなんて……ずっと？）

そこで、秀美は思い出す。今朝も同じような違和感を覚えたことを。

――君ならやれると信じていたよ。

「いつか、どこかでお会いしましたか？」

「ああ、一度だけな」

慧一は即答した。しかし秀美の頭に、彼と出会った記憶は欠片も見当たらない。

「あの……社長は六年間、アメリカにお住まいでしたね。盆も正月も帰国されないで、会長から奥様が寂しがつているとお聞きしました」

「そうだよ。俺は一度も帰国しなかった。そして君も、北米支部に来たことはない」

それでは、秀美と会ったというのは、彼がアメリカに渡る前のことなのだろうか――

秀美は唸った。いくら考えても思い出せない。もし本当に出会っていたなら、こんな強烈な人物を忘れるはずがないのに。

「すみません。まったく記憶にありません」

「……」

慧一は不機嫌というより、落胆の表情になる。秀美は自分が彼をひどく傷つけている気がした。「ええと、もしよろしければ、いつ、どこでお会いしたのかを、お聞かせ願えますか？」

「いつ、どこで……か」

慧一はいったん口を閉じる。静まり返った部屋で、秀美は緊張しながら答えを待った。

「ダメだ。君が思い出してくれなきゃ、意味がない」

肩透かしを食らい、秀美はぼかんとする。

「教えていただけませんか？」

「ああ。悔しいからね」

慧一は腕時計を確かめると、秀美の傍を離れて帰り支度を始めた。話は終わったと言わんばかり

の素っ気ない態度である。

(悔しいって、そんな。子どもみたいに)

こうなると、かえって真相が気になってしまう。けれど、社長の行動に合わせるのが秘書の仕事だ。納得いかないが、これ以上追及することはできない。

守衛室で待機している運転手の友部に連絡するため、スマートフォンを構えた。

「納谷君」

帰り支度を整えた慧一が、少し気まずそうな顔でこちらを見ている。

「帰国してからこれまでのことを謝る。君との再会が嬉しくて、つい舞い上がってしまったんだ」

「社長……」

過去の出会いについては謎のままだが、率直に詫言ひる姿から彼の誠意は伝わってくる。秀美の立場や気持ちを、おもんばかってくれたのだ。

「いえ、私こそ社長に対して失礼な態度をとってしまいました」

正直なところ、彼のアプローチは迷惑だったし、花束の意味も未だに理解できない。でも、それはそれとして、与えられた職務を全うするつもりだ。

「これからも、どうぞよろしくお願い申し上げます」

「ああ、頼りにしてる」

良かった——と秀美は思う。今後は妙なアプローチを仕掛けることなく、社長業に専念してくれるだろう。こちらが秘書として普通に接すればいい。

(過去の出会いがどんなものであれ、社長が私のことを『ずっと好きだった』なんてあり得ない。わざわざ追及する必要もないし、忘れてしまおう)

そう思っていたのだが——

「ところで納谷君。食事に付き合わないか」

「……はい？」

どういう意味だろう。秀美は念のため確認する。

「それは、仕事とは無関係のお誘いでしょうか」

「もちろん、個人的に誘っている」

聞き間違いだと思いたい。だって、この流れでどうしてそうなる？

「言っておくが、俺は仕事にかこつけて部下を嵌めるような、小狡いやり方はしない。公私混同は君も嫌いだろ？」

「……なっ」

「これからは多少控え目にアプローチするから、安心してくれ」

秀美は頭痛がしてきた。こちらの立場と気持ちを、おもんばかってくれたはずでは？ 今までの発言は全部おためごかしなのだとしたら、安心などできるはずがない。

「ハッキリと申し上げます。相手がどなたであれ、そういったお誘いはすべてお断りしています」

「ほう、問答無用か」

「はい」

慧一は肩をすくめるが、気分を害した様子はない。まったく、どこまで本気なのか疑わしい。こういう軟派なところが気に入らないのだ。

「さすがだな。そこが君の素晴らしいところだ」

「……お車をご用意いたします。少々お待ちください」

秀美はスマートフォンを素早くタップし、友部に「社長がお帰りです」と連絡した。一刻も早くご帰宅願いたく早く早口になってしまおう。

（いけない、いけない。落ち着け、私）

不埒な誘惑に負けてたまるか。こうなったら根競べだ。

「社長、お車をご用意いたしました。さあ、参りましょう」

ときばきと段取りする秀美に、慧一は苦笑を浮かべる。

「分かったよ。また明日、リベンジだな」

（何度誘われても、返事は『NO』一択ですから！）

堅物女と軟派男の攻防戦は、こうして幕を開けた。

湿り気を帯びた風が、梅雨の到来を報せている。今は六月の上旬。いつの間にか四月が終わり、五月も連休や度重なる出張でバタバタするうちに過ぎていった。

金曜日の夜七時。秀美は駅までの道を歩いている。

（かなり溜まってる。でも、何とか乗り切ってるわ）

ハードワークには慣れているので、体調はさほど悪くない。溜まっているのは肉体的な疲れではなく、鬱憤である。その原因は言うまでもなく、桜山慧一との攻防戦だ。

彼は毎日毎日、懲りもせず秀美を誘い続けている。その攻撃は一日のスケジュールをこなしたあと、秀美が身構える間もなく始まるのだ。

今日も必死にそれをかわし、何とか逃れてきた。

『明日は休日か……どうだ、納谷君。ドライブがてら食事に行かないか』

『お断りいたします』

社長相手でも秀美は遠慮しない。ハッキリ意思表示しなければ、どんどんつけ込まれてしまう。

それに、ドライブと言うからには慧一が運転するはずだ。きつとどこか遠くまで走り、食事してお酒を飲んで、泊まることになる。冗談じゃない！

『本当につれないな。親父の時は、それでもなかったようだが』

痺れを切らしたのか、彼は作戦を変えてきた。社長用端末に保存してある、前社長のスケジュールを調べたらしい。

『週に一度の割合で、スポーツクラブに同行してる。聞くところによると、君が親父に勧めたそうじゃないか』

秀美は内心ギクッとしたが、前社長にジムやプールでの運動を勧めたのは、主治医と相談した結果だ。つまり、秘書としての仕事のうちである。スポーツクラブまで同行し、様子を見守るのも、決して不自然な行為ではない。